

国際ミツバチ研究協会



文献紹介

Bee World 74 巻 4 号 (1993) の巻頭にはアフリカ蜂化ミツバチに関して Rinderer と Shimanuki が論説を寄せている。アメリカ合衆国ではアフリカ蜂化ミツバチが 1990 年にテキサス州南部に、また 1993 年にはさらに北側のいくつかの州に侵入したと推測されている。南米での分布拡大の時と違い、北米に侵入するアフリカ蜂化ミツバチはすでにかなりセイヨウミツバチとの交雑が進んでおり、刺害による死者も明らかに少なくなっている。しかし研究や経験を転じ、「殺人蜂」侵入記念碑を建立するような最近の風潮は危険であり、ブラジルやメキシコでの対策事業の成功を範例にしながら、また予期せぬ事態に備えてより一層の研究努力を続ける必要があると訴えている。

Matheson は「世界のミツバチ保健調書」と題して、300 近い文献を基に約 150 カ国のミツバチの病気の分布状況を、アメリカ腐蛆病、ヨーロッパ腐蛆病、チョーク病、サックブルード、ノゼマ病、アカリダニ（ワイト島病）、ミツバチヘギイタダニ、ハチジラミ（ミツバチシラミバエ）などについて 7 つの表と 10 枚の地図に示している。

Williams らは「イギリスの蜜源植物と花粉媒介及びハチミツ生産のための蜂群移動」で、イギリス養蜂協会の会員を対象に 3 年間にわたって行った詳細なアンケート調査の結果や他の団体の記録を基に、特に蜜源植物と花粉媒介への利用、移動養蜂に着目して、土地利用と養蜂業の業態の変化が植物の受精に必要なハチ類の減少を招いている現状を述べている。

Journal of Apicultural Research 32 巻 2 号 (1993) には 8 編の論文が掲載されている。

そのうちインドの Sihag が「亜熱帯地域のクマバチの行動および生態に関する研究」の続編（第 6～8 報）として「採餌における訪花選択と受粉効率」、「営巣場所の選択と巣の移動への反応」、「生活史（死亡率・寄生虫寄生率の季節変化とコロニー内性比）」の 3 報を載せている。

Kraus の「ミツバチヘギイタダニの寄生選択性」は、種々の方法を用いてダニが蜂児、出房直後の若い蜂、内勤蜂、花粉採餌蜂に対してどのような選択性を示すか調べたところ、総じて内勤蜂を好む傾向があることを明らかにした。また内勤蜂に寄生させておいたダニは再びと内勤蜂を好んだが、花粉採餌蜂に寄生させたものは内勤蜂と外勤蜂の識別ができなかった。

Patten らは「コケモモ農園周辺でマルハナバチを誘引する植物の利用」の中で、種々の環境においたコケモモへのマルハナバチ 6 種の訪花頻度を調べた。セイヨウミツバチと短舌種のマルハナバチが長舌種のものよりコケモモの花粉媒介者としては有効であった。ただし花粉媒介者としてマルハナバチを有効に利用するには彼らを誘引するような植物があることも重要で、高い生息密度を維持するための資源としても蜜源植物を農園周辺に植栽しておくことが肝要であるとまとめている。

トウヨウミツバチはミツバチヘギイタダニが寄生した蜂児を除去するという、セイヨウミツバチではほとんど見られない衛生行動を示す。Rosenkranz らは「異臭依存のミツバチヘギイタダニ寄生蜂児に対するトウヨウミツバチの衛生行動」の中で、この衛生行動には蜂児が異物に反応するのを頼りにダニや異物を取り除いて再度蓋をする経過をたどる場合と、ダニや異物の発する匂いに反応して蜂児を取り除いたり食べたりする場合の 2 型があるとし、この二つは遺伝的には独立した形質であるとしている。したがってこのダニに対する耐性の向上を目指すときは蜂児に損失のない前者の行動に着目すべきである。 (森中大晴)